

## 宗教性と死に対する態度<sup>1)</sup>

丹 下 智 香 子<sup>2)</sup>

### I 問 題

#### (1) 日本における死生観と宗教の関係の変遷

古来より、多くの文化圏において宗教は死と深い関係を持ち続けている。その関係について波平（1993）は「宗教は、人間存在の基本的観念を明確にし、死後の世界や霊魂についての観念を体系的なものに整えるうえで大きな影響力を持つ。より正確には、死を扱うからこそ宗教は成立するのであり、人間の死について何の観念も行為の形（儀礼）も明確にしなければ、それは宗教ではない」（p.124）と表現している。それではわが国の死生観と宗教はどのように関係してきたのであろうか。

古代人にとっての死生観は「古事記」の伊邪那岐神・伊邪那美神の神話にある「黄泉の国」に表されるような、「不浄」という、忌み嫌うべきものとしてのイメージが中心であった。清水（1990）によると、縄文期や弥生期においては死の直後に呪法あるいは「殯」の儀式、すなわち死者の甦り（＝黄泉帰り）や復活の願いを込めた儀式をまず執り行った。しかし魂振り（霊呼び）の甲斐なく死が確認された際には、死者の霊は畏怖の対象となり、「葬儀」で死の穢れを浄め、死者の霊の冥福を祈り、鎮魂を行ったのである。特に弥生後期以降、「霊魂不滅」が信じられるようになり、このあたりから死と宗教が結びつきを持つようになるのである。五来（1994）は日本人の霊魂観について、古代、あるいは庶民の場合には、個人の死は恐ろしい災害のもとになる「荒魂」（怨霊）の発生を意味し、祟りや荒れすさびのある非常に恐ろしい状態であったとしている。これらに述べられているように、日本人の死生観は死者の霊に対する畏怖の感情に

始まるといえる。そして、死者を畏怖の対象として留めるのではなく、それを浄化させてやがて恩寵の源である神へと変化させるという考えは、「宗教」が大きく関係している。清水（1990）は仏教の伝来が日本人の「祟り」の考え方に修正を加えることになったと主張している。すなわち、「仏教には『祟』の考え方がなく、仏僧は死の穢れや悪霊に触れることを怖れず、むしろ、屍体をねんごろに扱い、死者をねんごろに葬って埋葬し、悪霊を読教で鎮め、死者の追善供養をした。これは日本人の祖先崇拜の考えと結びついて、人の死や死者への不安を鎮めるのに役立った」（p.13）という。祟る荒魂を浄化（昇華）し「和魂」へ、そして子孫を守り慈しむ（集合的な）祖先／先祖あるいは「祖霊」、さらには恩寵を与える「仏」や「神」へと変化させるためには子孫による死者儀礼の積み重ねが必要であると考えられ（五来，1994；Klass, 1996；波平，1993），それが実行されていたのである。また、死者の供養は、直接的な家族関係にある者だけを対象としたのではない。様々な理由により子孫による儀礼の対象とならなかった死者の霊は「怨霊」あるいは「死霊」となり、飢饉や疫病などの災いをもたらす。そのため、それらの災いを回避するためにそういった霊を集めて公に鎮魂の祭（宗教的行事）なども執り行われてきたのだ。

さらに、日本人の死生観を特徴づけることとして、死後観の問題がある。そもそも、もともとの仏教では「輪廻転生する生は苦しみの長い連続を意味するが、死後に解脱することにより、この連関を断ち切れるならば、死は苦しみからの真の解放となる」（小松，2000，p.105）とされていたのだ。次の生へ進まなければならないような karma（業）が残されていなければ再生を止めることができるのであり（Klass, 1996），輪廻転生からの解脱（＝nirvana、『消える』こと）を目標としていたのだ。しかしながら、釈迦の死後に起こった大乘仏教において死後の世界が仏教に付加された（小松，2000）という。すなわち、nirvana という概念が変化し、肯定的なイメージを含む死後の世界観が持たれるようになって

1) 本研究は、「青年期における死に対する態度—発達と死の主題—」（名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士論文）の一部に加筆・修正・データの追加を行ったものである。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生。指導教官：村上隆教授。

たのだ。伝染病の流行や凶作・飢饉、激しい労働や衛生観念の不足といったことにより死が幼少壮老の区別なく人々を襲った時代には、死後の生（後生）は人々の要請でもあった（森岡，1984）。死に直面して生きる中で、無常な現世を否定し「それを超えたところに無限なもの、不変なもの、恒常的なものを追求しようとした」（清水，1990，p.15）のである。そのため、宗教は来世志向の契機を多分にはらみ、死者の追善を重要な職責とし（森岡，1984），やがて宗教と死は不可分の関係に至ったのである。この希求を受けて仏教の諸派が隆盛していき，中でも生前に犯した罪により人は地獄に落ちるが，念仏により極楽浄土へ救済される，という浄土教の「往生」のイメージは広く人々の間に浸透するようになった。こういった極楽浄土のイメージは現世において苦しい生活を強いられる庶民にとっては人生全体の収支のバランスをとるうえでは重要であったのであろう。それ故に宗教の信仰が生活の重要な位置を占めたことは想像に難くない。そして，かつての穢れた「黄泉の国」に代表される死後の世界は，仏教の地獄変相図や十界図，六道絵などで具体性を与えられ（五来，1994），これらが人々の死生観の中心を成すに至ったと考えられる。

しかし，近現代になると世の中は現世志向的な動きを示すようになり，死生観も次第に変化していった。庶民の生活が多少豊かになり，庶民が生きることを楽しむ余裕が出てきた近現代では，「あえて後生を希求し，来世に希望を託することもない」（森岡，1984，p.108）のである。また，宗教が政治的な支配の手段として用いられ，宗教自体が世俗化するという変化をしていくと，やがて宗教は人々の生活の中心ではなくなっていった。すなわち，「寺との関係は葬送儀礼のための関係にすぎなくなり，仏教による心の救済とか，修養という側面がうしなわれつつある」（清水，1990，p.18）のである。

## (2) 現代日本における宗教

それでは，現代の我々の生活において「宗教」はどういった状況にあるのであろうか。

各種研究機関や新聞社などが1990年代前半に行った調査結果を概観した石井（1997）によると，「信仰の有無」を問う質問に対して「信仰を持っている」と肯定する率は約3割でほぼ一定である。しかし青年に限定すると有信仰者率はそれを下まわり，大体5-20%程度となるが（井上，2003；石井，1997；小泉，2000；隈部，2003；與古田・石津・秋坂・名嘉・高倉・宇座・長濱・勝，1999），中には西沢（1998）のように43%という数値を報告している研究もある。すなわち，一般的には現代の我が国においては有信仰者は相対的に少ないといえる。その一方

で，日本統計年鑑（総務省統計局・統計研修所，2002）によると，2000年年末現在で日本の様々な宗教の信者総数は215,366,000名，同年の日本の人口は126,926,000名である<sup>3)</sup>。これを単純に計算すると，一人あたり約1.7の宗教の信者であることになる<sup>4)</sup>。また，幅広い世代の人を対象として行われた調査によると，神仏の存在を信じる人は約3-6割，何かの問題状況に陥った際に神や仏に祈ったことがある人は約6割，（自分の生活，あるいは人間の生活にとって）宗教は必要だと肯定する人は約5-7割，宗教に対して（親しみなどの）肯定的なイメージや感情を持つ人は約4-6割にのぼり，宗教への肯定的な態度も示唆されている（池口，1998；Nagamine，1988；NHK放送文化研究所，2000；NHK世論調査部，1984）。青年を対象とした調査においても，（人生，あるいは人間にとっての）宗教の必要性を肯定する人は約3-5割，神仏の存在を信じる人が約4-5割と報告されている（井上，2003；西沢，1998；與古田他，1999）。すなわち，本人自身の信仰と認識されている場合は相対的に少ないものの，一般的に宗教的なものに対する肯定的態度・信念は持たれていることが多いといえる。

さらにこういった各種調査の結果を参照すると，必ずしも宗教は我々の生活から姿を消したわけではないことがわかる。西沢（1998）が冠婚葬祭儀礼に関する質問への回答から「通過儀礼は現在巷間でよく言われているように『神道に生まれ，キリスト教で結婚，仏教に死す』と言うことになってきているのかもしれない」（p.35）と述べているように，一般的に冠婚葬祭においては現代でも宗教的な儀礼が実践されており，特に葬送儀礼に関しては「家の宗教」に基づいた伝統的な一連の行事（もしくはそれを簡略化したもの）が行われている。例えば，先祖の墓を守り供養することの必要性（あるいは義務）を肯定する人は約8-9割（池口，1998；森，2000）にのぼる。そして実際に墓参りに行く人（年に1-2回程度，あるいはときどき）は約7-9割（中村・中村，2001；NHK放送文化研究所，2000；西沢，1998；森，2000），青年に限定して前年のお盆の墓参りについて訊

3) 千人単位で記載されている概数である。

4) これは「伝統的な仏教であれば，ある家が寺に墓をもっていて，そこの住職に葬式を頼んでいれば，その家の世帯全員が信者（檀家）ということになるし，神社であれば，ある一定地域に住む人全体が信者（氏子）とみなされる」ものであり，「宗教団体によって信者のとらえ方の基準が異なるために生じた現象」（弓山，1994，p.100）とされている。

ねた場合でも約5割が該当するというように（井上，2003），非常に高い頻度で先祖供養が実施されている。

またそれだけではなく，正月に始まり，節句，盆や彼岸，クリスマス，大晦日の除夜の鐘に至るまで，年中行事には各種の宗教（神道，仏教，キリスト教など）と関連を持つものが非常に多く，それを実行している率もかなり高い（中村・中村，2001；NHK 世論調査部，1984）。金児（1994）は宗教行動を分類するためにクラスター分析を実施し，宗教行動を①「現世利益的行動」：おみくじ・易・占いなどをしてもらうこと，安全祈願や合格祈願，初詣などの祈願行為，お守りやおふだなどを身の回りにおくといった行動，②「慰霊的行動」：墓参りや仏壇・神棚へ供物を捧げる，などの行動，③「自己修養的行動」：聖書・経典などを読む，礼拝・おつとめ・布教などを行う，信仰や奉仕のグループへの参加などの行動，といった3つに分類している。そして大学生とその両親のこれらの行動を集計し，「自己修養的行動はあまりとられておらず，慰霊的行動と現世利益的行動が盛んである」（p.543）ことや，相対的に比較し「親世代は子世代に比べて，現世利益的行動よりも自己修養的行動と慰霊的行動に従事」（p.545）していることを見出している。類似した結果はNHK 放送文化研究所（2000）でも報告されており，自己修養的なものは高年層，現世利益的なものうち祈願は中年層，おみくじ・占いは若年層で多いといったように，年齢層によりその領域はやや異なるものの，何らかの形で宗教的な行動はかなりの高率で実行されている。しかしながら，有信仰者が相対的に少数であることを考慮すると，こういった生活の中に点在している宗教的儀礼や年中行事（習俗）は，我々自身の明確な信仰に基づいて行われることは少ないであろうし，我々がその宗教的な意味を深く認識している可能性も低いと推測される。結局，宗教を個人の信仰として持っている人は少ないものの，生活の中には宗教と関わりを持つ要素は依然として多く，「民俗宗教」ともいえるべき宗教的な意識は持たれている，というのが我が国の現状といえよう。

### (3) 宗教と死に対する態度

それでは，実際に「宗教」は死の主題とどのように関わっているのだろうか。

「死」のような「人間の生物学的な生存にとって基本的な重みをもつ欲求が充足されない状態」や，重要な他者の死のような「人間の社会的生存にとって基本的な欲求の不充足状態」（森岡，1975，p.18）において人は宗教に救いを求めるものであり，「死を扱うからこそ宗教は成立する」（波平，1993，p.124）。そして既述の通り，

実際に葬送儀礼や祖先崇拝に関連した死を扱う宗教的行動を実行する人は非常に多い。また Gray（1987）は，片親との死別を体験した青年を対象に調査を行ったところ，信仰を持つ青年は信仰を持たない青年よりもうつ尺度の得点が低いという結果を得ている。このように，宗教は現代においても死の主題と関わりを持つものであり，身近な他者との死別や，やがて訪れる自己の死といった，死に関する様々な出来事に対して人を対処せしめる役割を持つと考えられる。その反面，有信仰者に対して「自分自身にとっての宗教の意味」を調査し，その回答を分類したものとすると（NHK 世論調査部，1984），死に関係した内容としては「先祖をうやまう，とむらう」が12%の人によって述べられていたに過ぎない。また，重要な他者との死別を体験した青年に対してその喪失体験に対処するのに役立った事柄を調査した研究によると，「宗教」を挙げたのは回答者の中のわずか3%のみであった（Rask, Kaunonen, & Paunonen-Ilmonen, 2002）。すなわち，宗教的行動の実践や宗教への肯定的な態度が一般的であるにもかかわらず宗教を信仰していると自認する人が相対的に少数であるのと同様に，宗教と死の主題の関係は，必ずしも本人がそれとは意識していないという可能性が考えられる。

ここで個人の死に対する態度と宗教の関連を扱った先行研究を参照してみよう。先行研究によって得られた知見は，宗教あるいは死に対する態度を，何を指標として検討するかによって異なるようである。まず「宗教」のとらえ方に関しては，例えば各宗教がそれぞれ持つ固有の教義の知識・信念や儀式への参加を直接扱うことも可能であるし，例えば Glock & Stark（1965）は各宗教が持つそういった部分における差異の中に共通して含まれている，宗教性の核となる部分を，経験的次元，イデオロギー的次元，儀式的次元，知的次元，結果的次元として整理している。しかし，金児（1997）は宗教性の次元に関する経験的研究が我が国においては未だ行われていないことを指摘したうえで，宗教行動や民俗宗教性などを取り上げ，日本人の宗教性に関する一連の実証的な研究を行っている。さらに既述の通り，我が国においては民俗宗教的な意識はしばしば持たれているものの，自身の信仰を持つと認識する人は相対的に少数である。そのため，本人の自覚的な信仰の有無（および信仰する宗教）も宗教性の指標となり得る。そこでまず信仰の有無と宗教的行動，および宗教的信念に注目し，先行研究を参照していこう。

#### ①信仰の有無による差異

まず，死への不安を Templer（1970）の DAS（Death Anxiety Scale）などの一次元尺度で測定した

場合には信仰の有無による差異は示されていない(河合・下仲・中里, 1996; 杉山, 1997)。それに対して, 死に対する態度を多次元尺度を用いて測定した場合には, 部分的に信仰の有無による差異が示されている。例えば Gesser, Wong, & Reker (1987-1988) の Death Attitude Profile (DAP) やその改訂版を河合他 (1996) や隈部 (2003) が邦訳し用いたところ, 一般人を対象とした場合に限定すると両者で共通した結果としては Approach-Oriented Death Acceptance (死を幸福な来世への道筋と見なす受容) において無信仰者よりも有信仰者のほうが死を受容している。しかしながらどちらの研究においても「死の恐怖」には信仰の有無による有意な効果が示されていない。また小泉 (2000) は仏教を信仰している学生, キリスト教を信仰している学生, 無宗教の学生の死生観尺度得点を比較している。そして概要としては無宗教の学生よりも仏教・キリスト教を信仰する学生のほうが死を身近な, 生と連続するものととらえており, 死後にも靈魂などの形で生命が存続すると考えるという結果を得ている。なお, 「死の恐怖」については無宗教の学生とキリスト教を信仰する学生の間にのみ群間の有意差があり, キリスト教を信仰する学生のほうが死に対する恐怖が低いという結果を得ている。このように, 信仰を持つ人と持たない人では死に対する態度の部分的な差異が示唆されている。

## ②宗教的行動による差異

Fortner & Neimeyer (1999) は高齢者を対象とした死への不安に関する多くの研究をレビューし, それらの結果をもとに統計的な分析を行った中で, 宗教的信念(内発的な神への信心, 死後の世界への信念など)を単独で指標とした場合には, 宗教的行動(教会への参加, 聖書の勉強の頻度など)と混合し指標とした場合よりも, より大きな相関を示すという結果を得ている。そして, 死に対する態度のような研究においてはそれらが示唆することはかなり異なるため, 宗教的な信奉や信念の測定と, 教会への出席や宗教的な活動への参加といった宗教的行動の測定とを区別すべきだとしている。実際, Roff, Butkeviciene, & Klemmack (2002) が死に対する不安に効果を持つ要因を検討する中で行った分析でも, Fortner & Neimeyer (1999) の主張を支持する結果が得られている。

## ③宗教的信念による差異

「信仰の有無による差異」の項と同様に, 一次元尺度で(あるいは DAS を用いて)死への不安を測定した場合には宗教的信念による死に対する態度の差異は示されないようである(Hoelter, 1979; Rose & O'Sullivan, 2002; Suhail & Akram, 2002)。しかし, Hoelter

(1979) の MFODS (Multidimensional Fear of Death Scale) や Collett & Lester (1969) の Fear of Death Scale などの多次元尺度を用いた研究では, 宗教的な信念が「未知への恐怖」や「自己の死への恐怖」などの側面を中心に部分的に低い死への恐怖と関連するという結果を得ている(Cicirelli, 2002; Florian & Kravetz, 1983; Hoelter, 1979; Suhail & Akram, 2002)。

この宗教的信念の中でも特に, 「内発的宗教性」が死への恐怖との関連においては重要であるとされている。Allport & Ross (1967) は信仰がその個人の生活全般に関係するもので, 信仰が内面化され人格の一部となっている場合を内発的宗教性, それに対して信仰が自分自身の欲求達成のための道具として用いられている場合を外発的宗教性と大別した。Donahue (1985) はその内発的宗教性-外発的宗教性という概念を用いて行われた1970年代までの研究をレビューし, 死への恐怖は内発的宗教性の指標とは負方向で, 外発的宗教性の指標とは正方向で相関するという結論に至っている。この知見は1980年代以降に発表された研究でも概ね支持されており(Clements, 1998; Feifel & Nagy, 1981; Roff et al., 2002), 内発的な宗教性の傾向が強い人のほうが死への恐怖が少ないといえる。ただし, これらの研究の中では(内発的宗教性・外発的宗教性も含めて)宗教的な信念が死に対する態度の全ての下位尺度と負方向で関連を持つというわけではなく, 側面によっては関連性を示さなかったり, あるいは逆に高い死への恐怖と関連するという結果が報告されている(Cicirelli, 2002; Clements, 1998; Florian & Kravetz, 1983; Hoelter, 1979<sup>5)</sup>; Roff et al., 2002) ことも念頭に置くべきであろう。

このように, 宗教や死に対する態度の指標として何を用いるかにより, かなり異なる結果が得られるのである。本研究では, 信仰の有無, 宗教的行動, 宗教的信念の3つの側面から宗教性を把握していく。また, 死に対する態度については死への恐怖に限定されない, 多次元的な態度を測定できる尺度を用いることとする。これらの指標を用いて, 日本人の宗教性が死に対する態度とどのように関連するのかについて検討していこう。

5) Hoelter (1979) は相関が示された下位尺度のみについて結果を記載しているため(厳密に言えば記載された4下位尺度の結果のうち, 2下位尺度については無相関の範疇に入る結果である), 記載されなかった部分は無相関であったことが推測される。

## II 方 法

### (1) 被調査者

A<sub>1</sub>大学・A<sub>2</sub>大学・M大学・O短期大学の学生311名（男53名，女245名，不明13名）。被調査者の年齢は18－24歳に分布しており，平均年齢は18.93歳（SD=0.72）であった。

### (2) 実施時期

調査は2002年12月－2003年6月に実施した。

### (3) 調査内容

質問紙は以下の内容を含むものであった。なお，被調査者に対するネガティブな影響を極力避けるため，教示（質問紙表紙および口頭）で質問が「死」を主題としており，回答拒否ができる旨を明示した。その結果，2名が「死」を主題とした部分に回答拒否をした。

①死に対する態度尺度：丹下（1999）の死に対する態度尺度を用いた<sup>6)</sup>。この尺度は，存在の消滅や死の未知性，未完の終結等への恐怖を表す「死に対する恐怖（尺度1：高得点ほど死を恐れる）」，自殺の否定および状況は問わず「生」自体が目的であるとする「生を全うさせる意志（尺度2：高得点ほど生き続けたがる）」，死が人生に肯定的な作用を持つとする「人生に対して死が持つ意味（尺度3：高得点ほど死に意味を認める）」，死を他人事や苦難からの解放とする「死の軽視（尺度4：高得点ほど死を軽視）」，靈魂永続性を信じる「死後の生活の存在への信念（尺度5：高得点ほど死後の存在を信じる）」，身体が生より心の死を重視する「身体と精神の死（尺度6：高得点ほど身体への生に執着しない）」という6つの下位尺度から成

る。「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の5段階で評定させた。死に対する態度尺度の各下位尺度の平均値および $\alpha$ 係数を表1に示す。

②宗教観尺度：金児（1997）の宗教観尺度を用いた<sup>7)</sup>。

この尺度は「向宗教性」，「靈魂観念」，「加護観念」の下位尺度から成る。金児によると加護観念と靈魂観念は，「日本人の心の深層に隠れている原始的宗教性（→民俗宗教性）であり，当人もそれを宗教であるとは通常意識しない宗教性である」（p.330）とされている。各質問項目について，その意見にそれぞれ賛成するか反対するかを「全く反対」から「全く賛成」の5段階で評定させた。宗教観尺度の各下位尺度の平均値および $\alpha$ 係数を表1に示す。宗教観尺度の下位尺度間相関は.31から.50であった。

i) 向宗教性：向宗教性とは「常識的意味での宗教，つまり教団・教義・儀礼・戒律といった目に見える要素からなる宗教に対する態度」（p.330）であり，「一般的な意味で宗教に対して好意的態度（接近）を示すのか，否定的態度（回避）をとるのか」という次元に関するもの（p.328）である。「宗教によって，自己の存在の意味が教えられる」，「宗教が人生の意味を明らかにしてくれることはない（逆）」，「信仰に裏打ちされた生き方こそ，人の真の生き方

6) 生を全うさせる意志（尺度2）の「私が死ぬと親や親友を…」という項目を「私が死ぬと家族や親しい友人を…」に，死の軽視（尺度4）の「湾岸戦争で死人が出たということは…」という項目を「外国の戦争で死人が出るということは…」に修正した。

7) 本研究では，大学生を対象とした「第10章 日本人の宗教性の特質と対人観」における構成を採用した。

表1 死に対する態度および宗教観の各下位尺度平均値

	平 均	SD	平均/項目数	$\alpha$ 係数	
死 に 対 す る 態 度	死に対する恐怖（尺度1）	36.99	8.32	3.36	.84
	生を全うさせる意志（尺度2）	32.55	4.51	4.07	.65
	人生に対して死が持つ意味（尺度3）	21.08	3.77	3.51	.62
	死の軽視（尺度4）	15.40	3.90	2.57	.61
	死後の生活の存在への信念（尺度5）	13.37	3.21	3.34	.72
	身体と精神の死（尺度6）	11.93	2.24	3.98	.64
	思索深さ	3.43	1.22		
	思索頻度	2.13	1.00		
宗 教 観	向宗教性	30.93	7.22	2.58	.88
	靈魂観念	23.72	4.54	3.39	.77
	加護観念	28.04	5.18	3.12	.78

である」などの12項目によって測られる。

ii) 霊魂観念：霊魂観念とは「死者への畏怖の感情、あるいは願いごとをかなえたり祟りや罰を与えるような人知を超えた存在に対する畏敬の念、あるいは輪廻転生を信じること、そうした観念の複合したもの」(p.330)であり、いわゆる「タタリ意識」,「応報観念」に相当する。「死後の世界はあるように思える」,「死者の供養をしないとたたりがあると思う」,「神や仏をそまつにするとばちがあたる」などの7項目によって測られる。

iii) 加護観念：加護観念とは「風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつきに親しみを感じ、自然にも敬虔な気持ちをもった宗教観」(p.329)であり、「これが強く働くとお神の加護や報恩感謝の念となり、オカゲさまという恩情感がこの宗教性の中核をなす」(p.330)。「氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である」,「神社の境内にいと心が落ちつくことがある」,「昔からのしきたりや年中行事には抵抗を感じる(逆)」などの9項目によって測られる。

③宗教的・習俗的行動項目：宗教の実践、宗教に起源を持つ習俗化した行動、および(宗教に起源を持たない)超越的な存在や運命などを参照する行動、などを先行研究を参考に選定し、過去2-3年間にそれぞれの行

動をとったことがあるかないかについて回答させた。

この項目群は、因子分析(主成分分解、バリマックス回転)を行い、その結果から3つの下位尺度を作成した(各項目に対する反応の集計、および因子分析の結果を表2に示す)。項目1・2・5・6が宗教的祈願・慰霊行動、3・4が自己修養的行動、9・10・11が非宗教的現世利益希求行動を表すものと解釈された。各項目群中の実行数を各下位尺度得点とした。宗教的祈願・慰霊行動得点の平均値は3.46( $SD=1.02$ )、自己修養的行動得点の平均値は0.27( $SD=0.56$ )、非宗教的現世利益希求行動得点の平均値は1.30( $SD=0.75$ )であった。

④フェイスシート：家族や親しい友人との死別体験の有無、宗教の信仰の有無(および、信仰のある場合は宗教名)を尋ねた。家族や親しい友人との死別体験がある人が232名(74.84%)、ない人が78名(25.16%)であった。宗教の信仰については、「宗教を信仰していない」と回答した人が235名(78.07%)、「あまり熱心ではないが信仰している」が57名(18.94%)、「熱心に信仰している」が9名(2.99%)であった。後者の2群をあわせて「有信仰者群」とした。信仰する宗教名(あるいは宗派)の回答は大島(1996)を参照して「キリスト教系」,「仏教系」,「新宗教系」に分類した(表3)。

表2 過去2~3年間ににおける宗教的・習俗的行動の有無(%), および因子分析結果

No	過去2~3年間に		因子分析結果			
	なし	あり	I	II	III	$h^2$
1 神社やお寺でお守りやおふだなどを買ったり、おみくじを引いたりする。	12.54	87.46	.80	-.12	.09	.66
2 神社やお寺で入試合格や安全、幸福などを祈願する。	10.29	89.71	.77	-.06	.23	.65
3 教会の礼拝に行く。	93.87	6.13	-.12	.79	.11	.65
4 聖書や経典を読む。	79.61	20.39	-.06	.83	.08	.70
5 お墓参りに行く。	15.43	84.57	.56	.08	-.06	.33
6 初詣でに行く。	15.16	84.84	.74	-.10	.27	.63
7 クリスマスに関係した私的な行事(プレゼント、パーティー、デートなど)をする。	9.00	91.00	.47	-.01	.45	.42
8 六曜(大安・仏滅など)を調べて何かの計画を立てる。	84.84	15.16	.39	.43	-.29	.41
9 易者や占い師にみてもらう。	87.10	12.90	.01	.15	.53	.30
10 開運グッズ、ラッキーグッズなどを買う。	71.61	28.39	.10	-.04	.56	.32
11 雑誌や新聞の占い欄、インターネットの占いサイトなどを見る。	11.25	88.75	.13	.01	.72	.54
	固有値		2.85	1.58	1.19	5.63
	説明率		22.84	14.23	14.10	51.17

注)項目7・8は残余項目。

表3 信仰する宗教（単位：人）

		人 数	合 計
キリスト教系	モルモン教	1	4 (2)
	エホバの証人	1	
	カトリック	1	
	キリスト教	1	
仏 教 系	曹 洞 宗	1	46 (2)
	浄 土 宗	11	
	禅 宗	1	
	日 蓮 宗	1	
	法 華 経	1	
	仏 教	30	
	神道と仏教	1	
新 宗 教 系	創 価 学 会	3	5 (4)
	崇 教 真 光	1	
	立 正 佼 成 会	1	
不 明		12 (1)	
合 計		67 (9)	

注) 合計欄のカッコ内の数字は、合計中の「熱心に信仰している」と回答した人数を示す。

### Ⅲ 結 果

#### (1) 信仰の有無と死に対する態度

宗教の信仰の有無により死に対する態度に差異が示されるか否かを検討するため、無信仰者群と有信仰者群の間で、死に対する態度各下位尺度について $t$ 検定を行った(表4)。人生に対して死が持つ意味(尺度3)、死後の生活の存在への信念(尺度5)、および死に関する思索経験の深さについて有意差が示された。すなわち、有信仰者は無信仰者よりも死が人生に対して肯定的な影響をなすと考えており、死後の存在についての強い信念を持ち、死に関する深い思索経験があることが示唆された。

#### (2) 死に対する態度尺度と宗教観尺度の関連

死に対する態度と宗教観の関連を検討するために、被調査者全体および信仰の有無別に死に対する態度尺度と宗教観尺度の相関係数を算出し、後者に関して相関の差の検定を行った(表5)。まず被調査者全体では、宗教観の下位尺度はいずれも、人生に対して死が持つ意味(尺度3)および死後の生活の存在への信念(尺度5)と正の相関を示し、霊魂観念尺度のみが死に対する恐怖(尺度1)とも正の相関を示した。すなわち、向宗教性や霊魂観念・加護観念が強い人ほど人生に対して死が肯定的な意味を持つと考え、死後の存在についての信念が強かった。また、霊魂観念が強い人ほど死に対する恐怖が強かった。一方、信仰の有無別の両尺度の下位尺度間相関には、部分的に有意差が示された。死に対する恐怖(尺度1)と霊魂観念、および生を全うさせる意志(尺度2)と加護観念の相関は、無信仰者群では弱い正の相関を示し、霊魂観念が強いほど死への恐怖が強くなり、加護観念が強いほど最後まで生き続けようとする意志が強いが、有信仰者群ではこれらの尺度は無相関であった。また、加護観念は死に対する恐怖(尺度1)および死の軽視(尺度4)との相関においても両群間での有意差を示したが、両群ともこれらは無相関で、相関係数の符号が逆方向を示していた。

なお、宗教的信念の強さと死に対する恐怖の曲線的関係を示唆する先行研究がある。これを検討するため、まず宗教観の各下位尺度について、それぞれ得点分布をもとに人数がおおよそ1/3ずつになるように高群・中群・低群に群分けした。そして3群間で死に対する態度各下位尺度について分散分析を行った。そして有意差の示された部分について下位検定を行ったが、両変数の逆U字型あるいはU字型の関連(中群の得点の上方あるいは下方への突出)は示されなかった。すなわち、宗教的信念と死に対する態度の間での曲線的関係の存在は示唆されなかった。

表4 信仰の有無による死に対する態度各下位尺度の $t$ 検定結果

	死に対する恐怖 (尺度1)		生を全うさせる意志 (尺度2)		人生に対して死が持つ意味 (尺度3)		死の軽視 (尺度4)		死後の生活の存在への信念 (尺度5)		身体と精神の死 (尺度6)		思索深さ		思索頻度	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
無信仰者	37.18	8.13	32.39	4.55	20.72	3.72	15.54	3.75	13.11	3.02	11.96	2.25	3.38	1.26	2.09	0.97
有信仰者	35.70	8.55	32.83	4.43	22.41	3.74	15.15	4.29	14.17	3.55	11.88	2.22	3.73	1.00	2.29	1.08
$t$ 値	1.29		-0.70		-3.19**		0.72		-2.41*		0.26		-2.33*		-1.42	

注) \* $p<.05$  \*\* $p<.01$   
無信仰者群:  $n = 233$ , 有信仰者群:  $n = 66$ 。

宗教性と死に対する態度

表5 被調査者全体および信仰の有無別での宗教観と死に対する態度の相関

宗教観	死 に 対 す る 態 度							
		死に対する恐怖 (尺度1)	生を全うさせる意志 (尺度2)	人生に対して死が持つ意味 (尺度3)	死の軽視 (尺度4)	死後の生活の存在への信念 (尺度5)	身体と精神の死 (尺度6)	
向宗教性	全 体	-.03	.08	.26***	-.06	.22***	-.16**	.05
	無信仰者群	.03	.06	.20**	-.10	.22**	-.18**	-.06
	有信仰者群	-.15	.02	.27*	.02	.02	-.17	.17
	d 値	1.26	0.28	-0.49	-0.84	1.34	-0.09	-1.58
靈魂観念	全 体	.26***	.17**	.24***	-.18**	.70***	-.06	.13*
	無信仰者群	.35***	.21**	.19**	-.28***	.67***	-.08	.09
	有信仰者群	.07	-.03	.32*	-.05	.69***	-.05	.11
	d 値	2.06*	1.70	-0.97	-1.65	-0.27	-0.20	-0.16
加護観念	全 体	.07	.17**	.30***	-.05	.35***	-.05	.07
	無信仰者群	.19**	.25***	.29***	-.17**	.28***	-.13*	.05
	有信仰者群	-.14	-.09	.26*	.12	.34**	.10	.02
	d 値	2.34*	2.45*	0.19	-2.09*	-0.43	-1.64	0.19

注) \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

無信仰者群:  $n = 233$ , 有信仰者群:  $n = 66$ .

両群間の相関の値に有意な差が示された部分について太枠で囲んだ。

表6 死に対する態度各下位尺度を従属変数とした重回帰分析結果

STEP	死に対する恐怖 (尺度1)				生を全うさせる意志 (尺度2)			
	$F$	$\beta$	$r$	VIF	$F$	$\beta$	$r$	VIF
1	靈魂観念 28.81***	.32	.26	1.10	加護観念 8.20**	.19	.17	1.02
2	思索深さ 6.32*	.14	.12	1.01	思索頻度 4.78*	-.13	-.12	1.02
3	向宗教性 3.95*	-.12	-.03	1.08				
全 体	$R^2 = .12$ 13.33***				$R^2 = .04$ 6.55**			

STEP	人生に対して死が持つ意味 (尺度3)				死 の 軽 視 (尺度4)			
	$F$	$\beta$	$r$	VIF	$F$	$\beta$	$r$	VIF
1	思索深さ 43.84***	.35	.36	1.01	靈魂観念 17.47***	-.23	-.18	1.06
2	加護観念 28.43***	.23	.30	1.20	思索深さ 10.50**	-.24	-.17	1.39
3	向宗教性 8.91**	.17	.26	1.19	自己修養 4.50*	-.13	-.12	1.07
4	死別体験 5.98*	-.13		1.01	思索頻度 5.18*	.15	-.03	1.41
全 体	$R^2 = .25$ 23.83***				$R^2 = .11$ 9.78***			

STEP	死後の生活の存在への信念 (尺度5)				身体と精神の死 (尺度6)			
	$F$	$\beta$	$r$	VIF	$F$	$\beta$	$r$	VIF
1	靈魂観念 256.06***	.68	.70	1.02	向宗教性 7.01**	-.16	-.16	1.00
2	自己修養 3.92*	.09	.17	1.02	思索深さ 4.06*	.12	.11	1.00
全 体	$R^2 = .48$ 131.33***				$R^2 = .03$ 5.57**			

注) \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$



### (3) 宗教性の死に対する態度への効果

宗教性の諸側面の持つ死に対する態度への効果を検討するため、死に対する態度各下位尺度を従属変数とするステップワイズ方式の重回帰分析を行った。独立変数としては、信仰の有無（なし=0、あり=1）、宗教観各下位尺度得点、宗教的・習俗的行動下位尺度得点、死に関する思索性（思索深さおよび思索頻度）、死別体験の有無（なし=0、あり=1）を用いた。重回帰分析の結果、有意な効果を示した要因のみを表6に示す。死に対する恐怖（尺度1）については、霊魂観念、死に関する思索の深さ、向宗教性が有意な効果を示した。すなわち、霊魂観念が強い人や死に関する深い思索経験のある人、向宗教性の低い人ほど死への恐怖が強かった。生を全うさせる意志（尺度2）については、加護観念および死に関する思索の頻度が有意な効果を示し、加護観念の強い人や死に関する思索頻度の低い人ほど生を全うさせる意志が強かった。人生に対して死が持つ意味（尺度3）については、死に関する思索の深さ、加護観念、向宗教性、死別体験の有無が有意な効果を示した。すなわち、死に関する深い思索経験のある人や加護観念の強い人、向宗教性の高い人、および死別体験のない人のほうが人生に対して死が肯定的な意味を持つと認識していた。死の軽視（尺度4）については霊魂観念、死に関する思索の深さおよび頻度、自己修養的行動が有意な効果を示した。すなわち、霊魂観念が弱い人、死に関する深い思索経験のない人、自己修養的行動をとらない人、しばしば死について考える人ほど死を軽視していた。死後の生活の存在への信念（尺度5）については霊魂観念および自己修養的行動が有意な効果を示し、霊魂観念が強い人や自己修養的行動をとる人ほど死後の存在の信念が強かった。身体と精神の死（尺度6）については向宗教性と死に関する思索の深さが有意な効果を示し、向宗教性の低い人や死に関する深い思索経験のある人のほうが身体のみ生には執着しなかった。ただし、死に対する恐怖（尺度1）、生を全うさせる意志（尺度2）、死の軽視（尺度4）、身体と精神の死（尺度6）については、モデルとしては有意であるものの、重決定係数が.03から.12と非常に低かった。

## IV 考察

### (1) 本研究の被調査者について

宗教と死に対する態度の関連について考察する前に、本研究の被調査者について確認しておこう。フェイスシートを集計したところ、宗教を「熱心に信仰している」人は2.99%、「あまり熱心ではないが信仰している」人が18.94%で、両者を合わせると約22%の人が信仰を持っ

ていた。既述の通り、先行研究を参照すると青年は年長の世代よりも有信仰者の割合が少なく、大体5-20%程度となる。ただし、宗教系の大学の学生を対象とした丸山・ビーベラー（1996）の調査では有信仰者が約24%とやや高く、非宗教系の学校で調査を行うと約5-6%とかなり低い（井上・磯岡・葛西・川又・熊田・佐々木・永井・松本・弓山, 1998）といった違いが一般的に示される。本研究の被験校はいずれも非宗教系の学校であることを考慮すると有信仰者の比率がやや高く、宗教系の学校における数値に匹敵する。しかし石井（1997）の「世論調査資料」を参照すると、回答者の信仰に関して「信仰しているがあまり熱心ではない」といった選択肢が含まれた調査の場合には、概して信仰の「有無」の二者択一の場合よりも有信仰者率が高くなっている。そのため、本研究の被調査者は概ね一般的な標本と見なすことができると考えられる。なお表1に示した宗教観尺度の得点平均値によると、宗教に対してはやや否定的であり、霊魂観念および加護観念はニュートラルからやや信じているという程度であった。

また、彼らの宗教的・習俗的行動について見てみよう。表2に示した通り、「宗教的祈願・慰霊行動」に分類された項目、およびクリスマスに関係した私的な行事（項目7）は、過去2-3年に限定しているにもかかわらずいずれも全体の80%以上の人が行っている、非常に実行率の高いものであった。これらはいずれも宗教的な起源を持つ行動である。しかし本研究の被調査者の中で有信仰者は相対的に少数であることを考慮すると、明らかにこれらの行動は自身の信仰に基づく「宗教的な」意味合いで行われているのではなく、「習俗的な」意味合いのもとに行われていることが推測される。また、結果としての言及は行わなかったものの、有信仰者の中にも、自分の信仰とは異なる宗派の信仰に起源を持つ行動（あるいは宗教的な起源を持たない行動）を実行している者や、逆に自分の信仰に関連した宗教的な行動を実行していない者が数多く見られた。これらは先行研究においても指摘されている点であり、例えばリード（2000 奥山訳）が日本人を対象に行った調査では、キリスト教徒でも1-2割の人がお宮参り・初詣・各種の祈願行動を行っていることが報告されている。またリーダー（2001）は巡礼組織（接待講）の成員にインタビューを行い、浄土真宗に属しながら弘法大師を崇拝するという日常生活における実践との間に矛盾を感じていないことを被面接者が「あれは宗教、これが信仰」と表現したことを記している。上記の信仰の有無と合わせて考えると、我が国においては真の（内発的宗教性にに基づく）有信仰者は相対的に少数であること、しかし習俗的あるいは文化的な要

素としては宗教に関連した影響がかなり存在していること、そしてその影響は特定の一つの宗教のみからというのではなく、複数の宗教を暗黙のうちに受け入れていることが推測されよう。

## (2) 宗教性と死に対する態度の関連

老年期の発達課題の一つとして「死の受容」が挙げられたり、Holmes & Rahe (1967) において配偶者の死・家族の死・友人の死が再適応に困難さを有するライフイベントの上位に挙げられたりしているように、一般的に死の主題は、自己の死でも身近な他者の死でも、受け入れることに大きな困難さを伴うものである。そして宗教は、そういった困難さに対処する信念・思考の枠組を提供するために存在していると考えられる。これに関しては、人生に対して死が持つ意味（尺度3）や死後の生活の存在への信念（尺度5）において有信仰者は無信仰者よりも有意に強い信念を持っていたことや（表4）、民俗宗教性が強い人ほどこれらの信念が強いこと（表5）により支持されたといえよう。すなわち、既成の伝統的な宗教の信仰であれ民俗宗教性であれ、某かの形で宗教的な信念は生と死をつなぐ役割を果たしているといえよう。

しかし、それではなぜ有信仰者は無信仰者よりも「死への恐怖」が少ないという明確な差異が示されなかったのだろうか。これについてはいくつかの解釈が考えられる。

第一番目の解釈としては、信仰の度合や信仰する宗教の要因に由来する可能性が考えられる。例えば隈部（2003）の一般成人と僧侶を対象とした調査においては、僧侶を含めて分析した場合には「信仰により死への恐怖や不安が軽減され、回避することなく向き合い、肯定的受容が可能になる」（p.606）ことが示されているが、一般成人のみで分析した場合には信仰の度合による「死の恐怖」の有意差は得られていない。また、小泉（2000）の大学生を対象とした調査においては、キリスト教の学生と無宗教の学生の間では「死の恐怖」に有意差が示されているものの、仏教の学生と無宗教の学生との間では有意差は示されていない。これらの先行研究の知見を考慮すると、本研究では熱心な有信仰者が相対的に少数であったことや、有信仰者の大半は仏教徒であったことが影響して死に対する恐怖（尺度1）には信仰の有無による有意差が示されなかったと考えられよう。なお、Diggory & Rothman (1961)、小泉（2000）、Reimer & Templer (1995-1996) などにおいて有信仰者同士を比較した場合、信仰する宗教（あるいは教派）による死に対する態度の差異が示唆されている。本研究ではキ

リスト教および新宗教の信仰者が少数であったため異なる宗教の信仰者を一群として扱ったが、実際には信仰する宗教によりその死生観は異なる可能性が高いことが推察される。

第二番目の解釈としては、宗教性の方向性に由来する可能性が考えられる。金児・渡部（2003）によると、「加護観念」と本研究における「霊魂観念」に該当する側面（本研究で用いた霊魂観念尺度7項目のうちの5項目から成る『応報観念』尺度）はAllport & Ross (1967) の定義に従うと外発的宗教性に含まれるのである。既述の通り先行研究の知見によると死への恐怖は内発的宗教性とは負方向で、外発的宗教性とは正方向で関連するとされている（Clements, 1998; Donahue, 1985; Feifel & Nagy, 1981; Roff et al., 2002）。また、Donahue (1985) が先行研究のレビューから明らかにしたことによると、内発的宗教性と外発的宗教性の相関は、研究により中程度の負の相関から弱い正の相関までかなり広い範囲にわたっているが、各研究における標本の性質が相関の値と関連していることが示唆されている。例えば内発的宗教性の得点が高いほど、そして外発的宗教性の得点が低いほど、内発的宗教性と外発的宗教性の相関はより大きな負の値になることが示されている。本研究の有信仰者群は外発的宗教性がやや高いため（霊魂観念尺度得点については無信仰者群平均値=23.30,  $SD=4.29$ , 有信仰者群平均値=25.17,  $SD=4.65$ ,  $t=-3.05$ ,  $p<.01$ 。加護観念尺度得点については無信仰者群平均値=27.45,  $SD=4.61$ , 有信仰者群平均値=30.18,  $SD=6.21$ ,  $t=-3.32$ ,  $p<.01$ ）、外発的宗教性と内発的宗教性の関連は無相関、あるいは場合によっては弱い正の相関を持つこともあり得る。また、金児（1997）は石切神社の参詣者の向宗教性に内発的な宗教性と外発的な宗教性の両志向性が複合していたことに言及し、「この複合性こそ日本人の民俗宗教の重要な特質の一つだと思われる」（p.218）と述べている。これらの知見から考えると、有信仰者群が必ずしも高い内発的宗教性を持つとは限らないため、信仰による死への恐怖の低減という結果が示されなかったと解釈できよう。この解釈に関しては、純粋な内発的宗教性を測定することにより検討可能となろう。

第三番目の解釈としては、そもそも宗教性の影響により人生に対して死が持つ意味（尺度3）や死後の生活の存在への信念（尺度5）で測定されるような信念に差異が示されるに至ったのであり、「死への恐怖」は宗教を信仰してもあまり変化しないということが考えられる。既述の通り、先行研究の知見によると死への不安を一次元で測定した場合には信仰の有無や宗教的信念による差

異は示されていない。また、死に対する態度（あるいは死への恐怖）を多次元尺度を用いて測定した場合、必ずしも宗教性が死に対する態度のすべての下位尺度について恐怖を低減させる方向（あるいは肯定的な死に対する態度への変化の方向）で関連するというわけではなく、多くの場合「未知への恐怖」などを中心に部分的に関連を示すのみである。それと同様に、本研究でも宗教性が「死に対する恐怖」は変化させないにしても、他側面における変化をもたらすという形で効果を持つことを示唆したと考えることもできよう。

次に、死に対する態度各下位尺度を従属変数とした重回帰分析の結果（表6）から、「宗教性」の異なる側面が死に対する態度にそれぞれ持つ効果について検討していこう。

まず「信仰の有無」では、死に対する態度各下位尺度への有意な効果は示されず、「宗教的・習俗的行動」および「民俗宗教性」が部分的に有意な効果を示した。表4に示したように、信仰の有無で検定を行った場合は部分的に有意な効果を得ていたにもかかわらず、これを独立変数の一つとして重回帰分析に投入した場合にはそれが示されなかったのは、「宗教的・習俗的行動」や「民俗宗教性」などの宗教性の他の側面がより大きな効果を持つためと考えられる。

「宗教的・習俗的行動」については、「自己修養的行動」のみが有意な効果を持つことが示された。既述の通り、「宗教的祈願・慰霊行動」に含まれる行動は、もともとは宗教に起源を持つものの、宗教的な意味合いで行われているのではなく、習俗的な意味合いのもとに行われていると推測される。逆に「非宗教的現世利益希求行動」に含まれる行動は、そもそも宗教に由来しないものである。そして「自己修養的行動」は宗教的な側面における自己修養を意味し、有信仰者が少ない我が国においては、相対的にかなり実行率が少ない。これらを考慮すると妥当な結果であるといえよう。また、既述の Fortner & Neimeyer (1999) の主張からは「宗教的行動」は宗教性の指標としてはあまり有効でないことが推測されるが、本研究においても「宗教的祈願・慰霊行動」および「非宗教的現世利益希求行動」は有意な効果を示さなかった。そして「自己修養的行動」も部分的にしか有意な効果を示さなかったため、概ね Fortner & Neimeyer (1999) の主張を支持する結果といえよう。なお、調査回答からは、個人の信仰と宗教的行動が一致していない例が少なからず見出された。そのため、個人の信仰—その宗教の教義—その個人の宗教観—その個人の宗教行動、という一連の宗教性についての一致／不一致も含めて検討することも必要であると考えられる。

「民俗宗教性」については、重回帰分析において死に対する態度各下位尺度にそれぞれ部分的に有意な効果を示した。すなわち、本研究で扱った宗教性の3側面の中では最も死に対する態度との関係が深いものと思われる。しかしながら、モデル全体で見ても人生に対して死が持つ意味（尺度3）と死後の生活の存在への信念（尺度5）以外については重決定係数が非常に小さかった。そのため、信仰の有無・宗教的行動・宗教観という異なる側面における「宗教性」に関する指標をもってしても、ほとんど死に対する態度の諸側面を説明することはできないといえる。これはおそらく、現代の我が国における宗教の位置づけに由来すると思われる。例えばリーダー (2001) は「ある面では死後の救いの見込みとは人を動かさずにはおかない観念であるが、それは必ずしも慰めや今ここにある問題の解決という人間の要求を満たすものではない」(p.485) と述べている。また、日本人を対象とした Miller (1995) の調査では、新宗教への参加はソーシャル・サポートがあまり受けられない人に多いことが示唆されている。すなわち、死後生への強い希求があった時代などと比較すると、少なくとも現代社会においては（一般的な人にとっての）宗教の主たる役割が「自己の死」という主題からは離れ、現世利益のような部分に重点が置かれているのではないか。その一方で、金児・渡部 (2003) によると自己の死観と他者の死観を測定し、（便宜的にはあるが）統計的検定を行った結果、「死後の来世を信じる傾向は弱いけれども、…自己の死よりも他者の死に対して浄福な来世を期待」しており、「自己の死は消滅と捉えるのに対して、他者の死はそうではなかった」り、「自己の死に対して虚無的な見方をとるのに対して、他者の死についてはそれが無に帰するのではなく、死に何らかの意味を与えようという姿勢が顕著であった」(p.97) ことが報告されている。また、大学生を対象に家族や親族の葬式の方式を質問したところ、「わからない」と回答した人以外ではほとんどの人が特定の宗教を選択している（西沢, 1998）。さらに、多くの研究者が指摘するように、日本人のライフサイクル観には死後も含めた循環（あるいは円環）的な要素が見出せる（青井, 1993；小嶋, 2000；やまだ, 2000）。確かに問題部分でまとめたような、死者儀礼を十分に受けない怨霊による災いへの強い畏怖の感情や死者の霊魂が集会的な祖先の霊や神仏にまで昇華されていくという意識は現代においては希薄化したかもしれない。しかしこれらの知見を考慮すると、宗教に端を発する民俗文化的な信念・価値観が根強く残っているし、身近な他者の死への対処などに際しては依然として宗教的な要素が関わっているといえる。その意味では現代の我が国におい

ても、宗教と死生観の関わりが部分的にはあるが存在するといえよう。それと同時に、少なくとも単に信仰を持つか否か、といった既存の伝統的な宗教性だけでなく、民俗宗教性も死に対する態度と関連していることが示唆された。そのため、死に対する態度を検討する際の、文化的な観点の必要性が強調されたといえよう。

### (3) 終わりに

本研究は宗教性と死に対する態度の関連について検討してきたが、両者は部分的な関連を持つとはいえ、必ずしも宗教性で死に対する態度がかなりの部分で説明可能であるとはいえなかった。Terror Management Theory や象徴的不死性の理論に基づく実証的研究(Cicirelli, 2002; Drolet, 1990)においては宗教性は死への恐怖を低減させる変数の一つとして挙げられている。しかし逆に言うと、宗教性のみが死への恐怖を緩和する役割を担っているわけではない。それらの中で示唆されているように、他にも様々な変数が影響要因として考え得る。また、本研究において示唆されたように、「死への恐怖」を変化させるのではなく、死に対する態度の他の側面を変化させることによって人が死を受け入れていく可能性はある。今後、さらに死に対する態度に関わりを持つであろう他要因との関連についても検討していくことが必要であろう。

なお、本研究の被調査者は8割近くが女性であり、性別の構成比は非常に偏りが大きかったため、性別を分析の際の要因としては扱わなかった。しかし、死に対する態度にも宗教性にも、しばしば性差の存在が示唆される(金児, 1997; 丹下・福川・中島・坪井・新野・安藤・下方, 2003など)。そのため、可能性としては死に対する態度と宗教性の関連の仕方に性差が存在することも考えられるため、結果の解釈に際しては性差に関する部分は未解明であることに留意すべきであろう。

## 引用文献

- Allport, G. W., & Ross, J. M. 1967 Personal religious orientation and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 432-443.
- 青井和夫 1993 生と死の社会学序説 森岡清美(監修) 家族社会学の展開 培風館 Pp.49-64.
- Cicirelli, V. G. 2002 Fear of death in older adults: Predictions from Terror Management Theory. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 57B, 358-366.
- Clements, R. 1998 Intrinsic religious motivation and attitudes toward death among the elderly. *Current Psychology*, 17, 237-248.
- Collett, L., & Lester, D. 1969 The fear of death and the fear of dying. *The Journal of Psychology*, 72, 179-181.
- Diggory, J. C., & Rothman, D. Z. 1961 Values destroyed by death. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 205-210.
- Donahue, M. J. 1985 Intrinsic and extrinsic religiousness: Review and meta-analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 400-419.
- Drolet, J. L. 1990 Transcending death during early adulthood: Symbolic immortality, death anxiety, and purpose in life. *Journal of Clinical Psychology*, 46, 148-160.
- Feifel, H., & Nagy, V. T. 1981 Another look at fear of death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49, 278-286.
- Florian, V., & Kravetz, S. 1983 Fear of personal death: Attribution, structure, and relation to religious belief. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 600-607.
- Fortner, B. V., & Neimeyer, R. A. 1999 Death anxiety in older adults: A quantitative review. *Death Studies*, 23, 387-411.
- Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T. 1987-1988 Death attitudes across the life-span: The development and validation of the Death Attitude Profile (DAP). *Omega: Journal of Death & Dying*, 18, 113-128.
- Glock, C. Y., & Stark, R. 1965 *Religion and society in tension*. Chicago: Rand McNally.
- 五来 重 1994 日本人の死生観 角川書店
- Gray, R. E. 1987 Adolescent response to the death of a parent. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 511-525.
- Hoelter, J. W. 1979 Multidimensional treatment of fear of death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 996-999.
- Holmes, T. H., & Rahe, R. H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- 池口恵観 1998 臓器移植に関する日本人の意識構造

- (第1報)－死生観を構成する背景因子について－  
民族衛生, 64, 161-182.
- 井上順孝 2003 現代学生が示す宗教への意識と態度－  
1992年～2001年のアンケート調査の分析－ 國學院  
大學日本文化研究所紀要, 92, 15-52.
- 井上順孝・磯岡哲也・葛西賢太・川又俊則・熊田一雄・  
佐々木裕子・永井美紀子・松本由紀子・弓山達也  
1998 現代学生の宗教意識－1995～7年のアンケー  
ト調査の分析－ 國學院大學日本文化研究所紀要,  
82, 1-90.
- 石井研士 1997 データブック 現代日本人の宗教 戦後  
五〇年の宗教意識と宗教行動 新曜社
- 金児曉嗣 1994 大学生とその両親の死の不安と死観  
人文研究 (大阪市立大学文学部紀要), 46, 537-564.
- 金児曉嗣 1997 日本人の宗教性－オカゲとタタリの社  
会心理学－ 新曜社
- 金児曉嗣・渡部美穂子 2003 宗教観と死への態度 人  
文研究 (大阪市立大学大学院文学研究科紀要 第3  
分冊), 54, 85-109.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 1996 老年期におけ  
る死に対する態度 老年社会科学, 17, 107-116.
- Klass, D. 1996 Ancestor worship in Japan: De-  
pendence and the resolution of grief. *Omega: Journal of Death & Dying*, 33, 279-302.
- 小泉晋一 2000 大学生の信仰する宗教と死生観との関  
連 日本性格心理学会第9回大会発表論文集,  
64-65.
- 小嶋秀夫 2000 人間発達と発達研究が位置している情  
況 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次 (編) 人間発達  
と心理学 金子書房 Pp.3-34.
- 小松万喜子 2000 日本の現代の青年の死生観とその教  
育課題 佛教大学大学院紀要, 28, 99-114.
- 隈部知更 2003 DAP-R 日本語版の内容的妥当性－死  
への態度と信仰の関係－ 心理臨床学研究, 20,  
601-607.
- 丸山久美子・ビーベラー, H. 1996 日独大学生の  
「生と死」への態度に関する比較研究 聖学院大学  
論叢, 8, 191-222.
- Miller, A. S. 1995 A rational choice model of  
religious behavior in Japan. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 34, 234-244.
- 森 謙二 2000 墓と葬送の現在－先祖祭祀から葬送の  
自由へ－ 東京堂出版
- 森岡清美 1975 現代社会の民衆と宗教 評論社
- 森岡清美 1984 死後観念の変化について－歴史人口学  
的試み－ 日本常民文化紀要 (成城大學大学院文学  
研究科), 10, 79-116.
- Nagamine, T. 1988 Attitudes toward death in rural  
areas of Japan. *Death Studies*, 12, 61-68.
- 中村俊哉・中村 幸 2001 日本及びアジア系の大学生  
の宗教意識と多文化混合(1) 福岡教育大学紀要 第  
4分冊 教職科編, 50, 219-225.
- 波平恵美子 1993 弔い－死者儀礼に表現される死の観  
念 河合隼雄・清水 博・谷 泰・中村雄二郎 (編  
集委員) 門脇佳吉・西川哲治 (編集顧問) 死の科学  
と宗教 (岩波講座 宗教と科学7) 岩波書店 Pp.97-  
127.
- NHK 放送文化研究所 (編) 2000 現代日本人の意識  
構造 [第五版] 日本放送出版協会
- NHK 世論調査部 (編) 1984 日本人の宗教意識 日本  
放送出版協会
- 西沢 悟 1998 宗教心理と精神健康－現代大学生につ  
いて－ 北海学園大学学園論集, 96・97, 1-65.
- 大島宏之 1996 この一冊で「宗教」がわかる! 三笠  
書房
- Rask, K., Kaunonen, M., & Paunonen-Ilmonen,  
M. 2002 Adolescent coping with grief after the  
death of a loved one. *International Journal of Nursing Practice*, 8, 137-142.
- リーダー, I. 2001 あれは宗教・これが信仰－現世利  
益と日本の宗教の構造－ 国立歴史民俗博物館研究  
報告, 91, 481-492.
- リード, D. 奥山倫明 (訳) 2000 キリスト教徒と祖  
先の関係 P. L. スワンソン・林 淳 (編) 異文化  
から見た日本宗教の世界 法蔵館 Pp.72-96.  
(初出: Reid, D. 1981 Remembering the dead:  
Change in protestant Christian tradition  
through contact with Japanese cultural tradi-  
tion. *Japanese Journal of Religious Studies*,  
8, 9-33.)
- Reimer, W., & Templer, D. I. 1995-1996 Death  
anxiety, death depression, death distress, and  
death discomfort differential: Adolescent-  
parental correlations in Filipino and Ameri-  
can populations. *Omega: Journal of Death & Dying*, 32, 319-330.
- Roff, L. L., Butkeviciene, R., & Klemmack, D. L.  
2002 Death anxiety and religiosity among  
Lithuanian health and social service profes-  
sionals. *Death Studies*, 26, 731-742.
- Rose, B. M., & O'Sullivan, M. J. 2002 Afterlife  
beliefs and death anxiety: An exploration of

- the relationship between afterlife expectations and fear of death in an undergraduate population. *Omega: Journal of Death & Dying*, 45, 229-243.
- 清水徳蔵 1990 日中の死生観比較考－異文化への日中の対応比較(3)－ アジア研究所紀要 (亜細亜大学アジア研究所), 17, 1-31.
- 総務省統計局・統計研修所(編) 2002 第52回(2003年版)日本統計年鑑 日本統計協会
- 杉山あけみ 1997 死の不安測定－DAQの日本語版試作と検討－ 中京大学文学部紀要 文学部心理学科創設30周年記念特集号, 32, 129-138.
- Suhail, K., & Akram, S. 2002 Correlates of death anxiety in Pakistan. *Death Studies*, 26, 39-50.
- 丹下智香子 1999 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70, 327-332.
- 丹下智香子 2004 青年期における死に対する態度－発達と死の主題－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士論文(未公開)
- 丹下智香子・福川康之・中島千織・坪井さとみ・新野直明・安藤富士子・下方浩史 2003 成人中・後期における死に対する態度(4)－加齢に伴う変化の縦断的検討－ 日本心理学会第67回大会発表論文集, 1091.
- Templer, D. I. 1970 The construction and validation of a Death Anxiety Scale. *Journal of General Psychology*, 82, 165-177.
- やまだようこ 2000 日本文化の生命循環と生涯発達観 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次(編) 人間発達と心理学 金子書房 Pp.106-115.
- 與古田孝夫・石津 宏・秋坂真史・名嘉幸一・高倉 実・宇座美代子・長濱直樹・勝 綾子 1999 大学生の自殺に関する意識と死生観との関連についての検討 民族衛生, 65, 81-91.
- 弓山達也 1994 現代日本の宗教 井上順孝(編) 現代日本の宗教社会学 世界思想社 Pp.93-130.

(2004年9月30日 受稿)

## ABSTRACT

## Relationship between religiosity and attitudes toward death

Chikako TANGE

The purpose of this paper was to examine the relationship between religiosity and attitudes toward death. A questionnaire about religiosity and multidimensional attitudes toward death was administered to 311 students (mean age 18.93 years). In this paper, I defined religiosity consisted of religious affiliation, religious behaviors, and religious beliefs which was measured by Kaneko (1997)'s scale of Japanese folk religious beliefs. In this sample, 21.9% of Ss affiliated religion, and others did not. The former showed higher scores for beliefs of meaning of death for life, and existence of afterlife than the latter. The multiple regression analysis was conducted on each subscale of attitudes toward death. The dependent variables were religiosity indices, and indices of experience of thinking over death and frequency of thinking about death. The results revealed that Japanese folk religious beliefs were partly related to attitudes toward death, but the effects were very small except for "belief in existence of afterlife" scale of death attitude. The meaning of religiosity for attitudes toward death was discussed.

Key words: attitude toward death, religiosity, Japanese folk religious beliefs.